
まだ愛を知らない

川本流華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ愛を知らない

【Nコード】

N5406P

【作者名】

川本流華

【あらすじ】

亡くなった母の想いを伝えたい

詩を歌う少女は夢を持っていたが、ふとそこに自分が居ないことに気がついた。

そんなとき、一人の男子生徒と出逢う。

父のような悲しい目をする彼、ありのままの自分を受け入れてくれる彼。

少女は彼に恋をする。

ありがとう（前書き）

映像制作用に書いたものです。

短編な作品で細かい描写も省いておりますが、読んでいただければ幸いです。

ありがとう

四時間目の授業が終わると、生徒たちは昼食の準備をし始めた。男子の多くは購買に駆け出し、女子は机の位置を変えて弁当を広げた。

昼のBGMは放送部選曲のJ・POPが主体だった。

途端に賑わいだした校舎。その喧騒を背に一人の女子が教室を抜け出した。

誰も使わなくなった旧校舎。その屋上に彼女はいた。彼女の日課はここで昼食をとることとその後ギターの弾き語りをする事だった。

彼女はとりわけ屋上の入り口の上に乗るのが好きだった。

片田舎のこの町には高い建物がなく、遠くまで見渡せるここからの景色は彼女のお気に入りだった。

十月を過ぎると枯葉や紅葉が町を彩っていた。

その日彼女が昼食をとっていると、珍しく人が入って来た。

彼女が高校に入学してから二年間、ここに人が来るのは初めてだった。

(何しに来たんだろう?)

彼女は箸を口に運びながら、男子生徒に目を遣った。

朝礼で何度か見たことのある生徒だった。何かで表彰を受けていたが、何の表彰かは覚えていなかった。

しかし、彼の顔は覚えていた。

表情はいつも笑顔。目は優しい印象だったが、決まって寂しい印象を受けた。

そう、彼女の父が母のことを語るときと同じ顔をしていた。

彼女の母親は彼女が幼いときに病気で亡くなった。

両親はいつも互いのことを一番に想い合っていたと知り合いのおじさんが話してくれた。

その想い人を話すときと同じ表情を彼はしていた。

彼女はギターを手に取った。日課の練習という意味もあつただろう。しかし、彼の重い空気を軽くしたいという意味合いが強かった。スローテンポのバラードからポップな曲と三曲弾き語った。

それは母が作った詩だった。彼女はそれに旋律を加えた。

どんな想いで作ったのだろう、その言葉の意味の一つ一つを考えながら丁寧に歌い上げた。

唄い終わると、彼女はギターを横に置いた。

彼女は窺うように彼のほうへ目を遣った。

しかし、そこに彼の姿はなかった。

彼女は一息ついた。

「ありがとう」

その言葉と同時に扉が閉まった。

彼女は照れくさそうに頭を掻いた。

彼女は大の字に寝転がった。

ゆっくりと流れる雲を見つめながら、深く息をした。

その日の放課後、彼女は進路指導室に呼び出された。

彼女は進路に悩んでいた。

夢はあるし、努力もしている。しかし、だからといって叶う保障はどこにもなかった。

彼女には自信がなかった。

『シンガーソングライター』

でかでかと書いた進路志望調査表は具体的に書くようにと付き返された。

彼女の夢は母の詩を多くの人に聴いてもらうことだった。

母の優しいさや強い想いを届けたい。

そのために彼女はギターを弾き始めた。

練習を繰り返して、時間を見つけては路上で弾き語った。
彼女は気づいていた。

そこに彼女がいないということに気がついていた。

この詩は母のもの。いくら自分で旋律を載せたところで、伝えたい想いは母のもの。

アイデンティティが確立していくにしたがって、彼女は悩むようになっていった。

「どうすれば、ママのような詩が作れるだろう」

ため息混じりに廊下を歩いていると、大きく飾られている絵が目に付いた。

ふと先程屋上で見かけた男子生徒の姿が脳裏を過ぎった。

「ああ、思い出した」

額の下に書かれている名前を見て彼女は確信した。

『野咲 蓮』

自分と同じ文字が名前にあることでより印象深かった。

彼の名前は定期的に目にした。中間テストや期末テストでは必ず上位の貼り出しに名を連ねていた。人当たりもよく、一年、二年と委員長をやっていたそうだ。今年は何調不良で新学期早々休んでいたためその任を降りていると噂で聞いた。

彼の中で特に秀でているのは絵の才能だった。コンテストやコンクールに出しては度々賞をもらっていたようだ。

屋上での彼の表情を思い返した。

(あの『ありがとう』はどういう意味なのだろう?)

彼女は旧校舎の屋上に目を向けた。

静かな廊下に下校のチャイムが響き渡った。

奇遇だね

次の日も彼女はいつものように旧校舎の屋上で過ごした。昼食を終えると寝転がり、空を見上げた。

彼女の母は幼いときに両親を亡くした。彼女にとって祖母にあたる人は病気で、祖父にあたる人は祖母が亡くなったときに自殺をした。

祖母の病気を遺伝した母はその後病院で過ごしていた。

一日一日近づいてくる自分の死と向かい合いながら、誰も近づけることなく、誰も愛することなく過ごしていた。

そこから生まれる詩は哀しいものが多かった。自分の運命を悲観するもの、身勝手に命を捨てた祖父を嘆くもの。父と出会うまでの詩は重く哀しいものが多かった。

一方で父と出会ってからの詩は優しいものが多かった。出会いに歓喜するもの、純粹に想いを歌ったもの。足元まで迫った死に臆することなく優しい詩を歌った。

彼女は幼いときに母を亡くした。しかし、多くの人が母のことを教えてくれた。そして、母の残した詩があった。

まるでそこに居るかのように母の存在がそこにはあった。

彼女には母が亡くなったという認識があまりなかった。

「経験が違いすぎるよ」

彼女は母の想いを伝えきれていない気がしていた。

空に伸ばした手が小さく感じられた。

「何が足りないのだろう」

伸ばした手を戻すと、彼女はゆっくりと目を閉じた。

『私はひどい母親ね。彼が一人にならないためにあなたを生んだけれども、あなたには私と同じ辛い経験をさせなければならぬ』
彼女の母親は彼女を膝に載せ、頭を撫でた。

それは母が亡くなる少し前だった。足が動かなくなり、車椅子での生活を余儀なくされていた。

『私の想いは愛まで届かなかったな』

二階の子供部屋から外を眺めると、差し込む日差しに目を細めた。『むずかしいこと言ったね』

彼女の母は穏やかに笑うと、聞こえないくらいの声で、ごめんね、と呟いた。

(何で謝るの？ 私、幸せだよ)

目を開けると、彼女はゆっくりと身体を起こした。

(今日は気分が乗らないな)

彼女はギターを背にかけると、屋上の入り口から飛び降りた。

着地すると、校舎に目を向けた。

教室では相変わらず生徒たちの声で賑わっていた。

(あそこに行く気もしないな)

彼女は一つ息をつくとき、旧校舎の中に入っていった。

旧校舎は使われなくなつて久しかった。壁は汚れ、床板が所々欠けていた。使っていた机や椅子、黒板などは新校舎に運ばれ、草臥れた広い部屋がいくつも並んでいた。

そのうち取り壊されるよううわさも立っていた。

少し遠回りをしようと歩いていると、ペンキのようなにおいが漂ってきた。

(この先は美術室だっけ?)

彼女は入り口の前で立ち止まった。

(……誰か使っているのかな?)

中では確かに物音がしていた。

彼女は深く呼吸をすると、扉に手をかけた。

扉を開けると、彼女は目を細めた。

部屋の中に日の光を遮るものは何もなく、白く塗られた壁に反射された光が部屋中に満ちていた。

彼女は細めた目をゆっくり開いた。すると、一人の男子生徒がこちらを見ていることに気がついた。それは昨日屋上で見かけた人だった。

昨日とはまるで違う落ち着いた表情だった。

この温かくて柔らかい空気を彼が出しているような錯覚さえ感じられた。

彼は壁一面に絵を描いているようだった。

彼は何も言わず、すぐに絵を描く作業に戻った。

「授業始まるよ」

彼女がそう言っても彼は手を休めなかった。

「いいんだ」

彼は一言つぶやいた。

声をかけようとしたが、あまりに真剣だったため気が引けた。

しばらく呆けるように彼の作業を見ていた。壁という大きなキャンバスに時に大胆に身体を動かし、時に細かく指を動かし、彼は作業を進めた。

まだ下書きのようだったが、きっと優しい絵になるのだろうと想像できた。

次の授業の予鈴が聞こえてきた。

彼女は意識を戻した。そして、戸惑いながらも静かに扉を閉めた。不思議な気持ちだった。彼女が母の膝の上で詩を聴いたときのように心が温かさで満ちていくような感覚。そして、それは彼女が自分の歌を通して聴く人に伝えたい気持ちだった。

彼女はギターケースの紐をギュッと握ると、教室に向かった。

午後の授業は何も頭に入らなかった。昨日までの悩みも忘れるくらいに温かさに満ちていた。

（早く終わらないかな）

頬杖を付きながら、彼女は一つ息を吐いた。

授業が終わると、彼女は再度旧校舎に向かった。

(彼の絵が見たい)

彼女は昼に見た光景に惹かれていた。

美術室の前に立つと、中から音が聞こえた。

彼女は先ほどのように深く呼吸をすると、覚悟を決めるようにうなずいた。

彼女が扉を開けると、彼はまだ絵を描いていた。

「ずっと、描いていたの？」

「……時間がないんだ」

彼は振り返ることなく手を進めた。

彼の言葉には距離を感じた。それは躊躇いながら無理に突き放すような、不器用な距離のとり方だった。

彼女は勇気を持って美術室に足を踏み入れた。

一歩踏み出したその足が少し震えているのを感じた。

彼は手を止めて彼女のほうを見た。

『ごめんね』

なぜか不意に母の言葉が脳裏を過ぎった。

(邪魔しているよね。怒られるかな)

彼に聞こえるのではないかと思うくらいに彼女の心拍数は上昇した。

彼の口が開いた。

彼女はビクツと目を細め、顔を横に向けた。

「昨日屋上で歌っていたバラードをまた聴かせてくれないかな」

彼女が彼に目を向けると、彼は穏やかに微笑んでいた。

彼女の表情は途端に明るくなった。

「う、うん」

彼女が部屋に入ると、彼は椅子を用意した。

美術室の少し中央、少し後方に置かれた椅子に彼女は座った。

彼女がギターのケースを開く前に、彼は作業に戻っていた。

彼女は彼の背を見ながら詩を歌った。

彼は彼女の歌を背に絵を描き進めた。

夕日が部屋をオレンジ色一色に染めるまで、会話一つすることな

く時間が過ぎていった。

ひとしきり唄い終わると、彼女は彼の描く絵を眺めていた。きりがついたので、彼がようやく手を止めた。

「今日は終わり？」

「ああ、うん。夕日になると色がわからなくなるからね」

彼は道具をタオルに包み始めた。

「そうなんだ」

彼女は外に目を移した。

「夕日って綺麗で落ち着く印象だったけれど、困る人もいるんだね」
彼女の言葉に彼はクスツと笑った。

「別に困ってはいないよ」

彼もまた外に目を移した。

「切ない気持ちにはなるけれどね」

そう呟いた彼の横顔は昨日の屋上と同じ表情だった。

彼女は彼の片づけが終わるまでギターを奏でた。

彼の片づけが終わるころ、彼女もギターを片付けた。

「また来てもいいかな？」

窺うように彼女は彼の顔を見た。

「……どうぞ」

彼は穏やかに微笑んでいた。

「僕の名前は野咲蓮。野に咲く蓮で野咲蓮。君は？」

「冬原華蓮」

「華蓮？」

「そう、冬に原っぱの原。華蓮は蓮の華」

「蓮…… 奇遇だね」

「そうね」

穏やかな一日が夕日と共に終わりを告げた。

君は君なんだ

華蓮の家は小さな喫茶店を開いている。

病気で車椅子の生活だった母のため、椅子やテーブルは少し低く設置されているが、年寄りの多いこの町では丁度良いらしい。

開店から閉店まで憩いの場として人が集まった。

「おかえり、華蓮ちゃん」

「おばちゃん、ただいま」

「何かいいことでもあったのかな」

「え、別にないよ」

華蓮ははにかみながら二階の自室へと上がっていった。

「あれは何かあったね」

「恋でもしたかね」

「だと良いですね」

客と父の談笑が広がっていた。

閉店すると、父が夕食の支度をした。物心付くころ、華蓮が家事を行うと申し出たことがある。しかし、父に自分のために時間を使うようにと断られた。

手伝うことはあっても家のことを中心に行うことはなかった。

部屋の机には一冊のノートが大事に置いてあった。

表紙には『冬原美雨』の文字が書かれていた。それは華蓮の母親が詩を書くときに使っていたノートだった。

美術室で華蓮はノートを手に持っていた。

「冬原？」

蓮は描く手を止めて振り返った。

「そう、冬原は亡くなった母の姓なの。母は病気でもう長くないってわかっていたから、繋がりを残す意味で父が姓を継ぎたいと言ったの」

二人が出会って一週間が過ぎていた。

二人は昼食の時間と放課後の日が沈むまでの時間を一緒に過ごした。

「僕たちは良く似ているね」

「うん？」

「僕も五年前に母を病気で亡くしたんだ」

屋上で蓮の表情が脳裏を過ぎった。

「祖母の病気を遺伝してね」

それはあまりに同じ境遇だった。

しかし、あまりにことなる体験であったように感じた。

華蓮は彼の背後にある絵に焦点を合わせた。

(私には……)

ポツッ、ポツッ

ノートの表紙に雫が零れた。

華蓮の目からは自然と涙が零れていた。

(きっと違う。私と君は違う)

「だから君の歌声に感動したんだね」

(違う。私はあんな表情を浮かべたことがない)

「だから……」

「違う」

思わず大きな声を上げてしまい、華蓮はハツとした。

「……ごめん」

蓮は穏やかな表情で作業に戻った。

華蓮は気づいていた。蓮の目が哀しさに曇ったことに気がついていた。

「ごめんなさい」

華蓮は彼の背中に頭を下げた。

「屋上で君の顔を見たとき、父と同じ表情をしていた。かけがえない人を失ったような表情をしていた。……私は母が亡くなって辛い思いをしたことはない。……私はあんな哀しい表情を浮か

べたことはない」

「うん」

「私が歌っている詩は母が作ったもの。君が共感したのは母の思い。辛い思いばかりした母の思い、父と出会って幸せの中去らなければならなかった母の思い。……そこに私の思いなんて少しもないんだ」

「……」

「私と君は違うんだ」

いつの間にか絵を描く音が止まっていた。

何を思っているのだろう。どんな顔をしているのだろう。

華蓮はノートを強く握り、目を伏せた。

「君の詩を聴かせてくれないかな」

蓮の言葉に華蓮は顔を上げた。

華蓮はゆっくりと何度も首を横に振った。

「確かに同じじゃないね。似ているといったのも確かに君のお母さんのほうだったかもしれない。でも、だからこそ、僕は君の詩を聴いてみたい」

「無理だよ。私にはママのような詩は作れない」

「作る必要はないよ。君にしか歌えない詩を作ればいい。僕は僕だけの母親を亡くした。君は君だけの母親を亡くした。どんなに似た経験をしても決して同じではない」

蓮は手に持ったブラシをタオルの上に置いた。

「君のお母さんは辛い思いばかりしたかもしれない。君がもし幸せに生きてきたのならお母さんとは違う詩が歌えるだろう」

蓮は別のタオルで手を拭いながら華蓮に歩み寄った。

「私は、私の夢は母の詩を歌うこと。母の想いを一人でも多くの人に伝えること……」

華蓮は再度目を伏せた。

「それなら君にしかできない伝え方をすればいい。君はお母さんではないよ。君は君の中のお母さんの想いを歌えばいい」

蓮は膝をつくと、伏せた華蓮の目を見た。

「君は君なんだ」

優しい声で、そして、力強い声で蓮は言った。

握った二人の手の上に涙が零れた。

ここ最近心に支えていたものが少し楽になった気がした。

「この壁の絵ができるころには君の詩が聴きたいな」

華蓮は真っ直ぐ蓮の目を見た。

「……私なりに母を想って、母の気持ちを想像して歌ってみる」

「うん」

「もし、それができたら自分の詩を歌ってみる」

「うん」

蓮はニコツと笑った。

つられるように華蓮もニコツと笑った。

「ありがとう」

華蓮はそのまま唇を合わせた。

昼休みの終わりを告げる鐘が遠くで響いていた。

君のおかげだね

冬が近づいてきた。

華蓮が肌寒さを感じる中、蓮は汗を拭いながら一つの動作を丁寧に力強く行っていた。

壁一面に絵を描くことがどれ程の労力を要するのか、華蓮は背中を見ながら想像した。

（私の歌は少しでも彼に安らぎを与えられているだろうか？）
華蓮は心で思いながら、一つ一つの言葉を丁寧に奏でた。

日が暮れるのが早くなり、蓮の作業時間が減っていった。
一方で蓮との会話時間は少し増え、華蓮は少し嬉しい気持ちだった。

日が暮れると、二人は 窓側の壁にもたれ掛かりながら肩を寄せた。

「授業はでなくていいの？」

華蓮はポツリと尋ねた。

「学校は随分前に辞めたんだ」

華蓮は驚いた顔で蓮のほうを見た。

「どうして？」

「この絵に時間を費やしたくてね」

蓮は壁に目を遣った。

壁には聖母のように微笑んでいる女性の絵が少しずつ出来上がっていた。

「僕もまた、母親の想いを表現したくて絵を始めたんだ。でも、あの日君の歌を聴いて自分の思うままに描いてみたくなった」

「私のせい？」

「違うよ。君のおかげで」

蓮は華蓮の目を見て微笑んだ。

「『大切な人と接するようにすべての人と接しなさい』……それ

が母の最期の言葉だった」

「それができたら素敵だね」

「うん…… 母にとつての愛は万人に等しく与えるものだった。典型的な博愛主義者だね。僕もそれを心がけてきたけれど、随分難しい」

「うん」

「僕はきつと誰も愛したことがないんだ」

「……」

蓮はゆっくりと立ち上がると、華蓮に手を差し出した。

「さあ、送っていくよ」

「うん」

華蓮は手を取り、立ち上がった。

華蓮の家の前まで来て、二人は別れた。

「ねえ、今度家に寄ってよ」

彼の背中に声をかけると、彼はゆっくりと振り返った。

「うん」

夕闇で華蓮は気がつかなかった。

蓮の目は哀しみに包まれていた。

次の日、彼は旧校舎に現れなかった。

(何か悪いこと言ったかな?)

華蓮は不安と心配で何も手に付かなかった。

いつもの席に座り、日が落ちるまで描きかけの絵を眺めていた。

次の日、彼は当たり前前のようにそこにいた。

華蓮は何も聞かなかった。蓮のほうから話してくれるのを待っていたのかもしれない。

しかし、昨日の話をすることはなかった。

華蓮はいつものようにギターを弾き、蓮はそれを聴きながら絵を進めた。

日が暮れると、二人は少し長く話しをし、華蓮の家まで送ってい

った。

「今日、お邪魔してもいいかな？」

突然の申し出に華蓮は顔を綻ばせた。

「うん、もちろん」

華蓮は満面に笑顔を浮かべると、家である喫茶店のドアを開けた。

蓮は華蓮にカウンター席へ案内された。

目の前には華蓮の父が居り、蓮は少し困惑した表情を浮かべていた。

その様子を見て華蓮はクスクス笑っていた。

「華蓮ちゃん、いつものように何か弾いてよ」

「うん、いいよ」

華蓮は笑顔で答えると、ギターを片手に客の輪の中に入っていった。

「コーヒーでいいかい？」

華蓮の父は落ち着いていた口調で尋ねた。

「あ、はい。ありがとうございます」

華蓮の父はコーヒーをカップに注ぐと、スツと差し出した。

落ち着く香りだった。時折華蓮から香るもので、気分が落ち着いていた。

「君のことは華蓮から聞いているよ。迷惑をかけていないかな？」

「いえ、彼女の歌にはいつも優しい気持ちにさせていただいています」

蓮の言葉を聞いて、華蓮の父は穏やかに微笑んだ。

「あれは妻の作った詩なんだ。少し前までは無理をして、妻になり

きろうとして歌っていたのだけれど、最近はその感じがなくなつた」

「ええ」

「君のおかげだね」

蓮は首を横に振りながら、照れくさそうに目を伏せた。

「僕のほうが救われています。彼女のおかげで僕は母の想いを感じることができた」

「君のお母さんも確か……」

「ええ。病気で亡くなりました。母は『大切な人と接するようになす

べての人とも接しなさい』と僕に言いました。でも、僕はその気持ちがよくわからなかった……でも、彼女とであって、大切な人ができて少しわかった気がします」

蓮は穏やかな表情を浮かべていた。

「……僕は彼女に恋をしています」

蓮の言葉に華蓮の父は嬉しそうに笑った。

「博愛主義者は恋をしないと云うね。逆に恋をする人は広く人を愛さないと……しかし、私は思うんだ。恋と愛は全くの別物ではないかってね」

「別物、ですか」

「好きなスポーツと好きな食べ物を比べるようなものだよ。どっちも好きでいいんだ」

「……」

蓮はカップの中をジッと見ていた。

「君は恋をして、愛を知ったんだね」

蓮はさすがのように華蓮の父の顔を見た。

「僕は……」

今にも泣き出しそうな顔をして蓮は静かに俯いた。

華蓮の曲が店内を温かく包んでいた。

コーヒートを飲み終えると、蓮はゆっくりと立ち上がった。

「ごちそうさまでした」

「帰るのかい？」

「ええ」

華蓮は手を止めた。

「今日はありがとう」

蓮の言葉を聞いて、華蓮は穏やかに微笑んだ。

「うん」

華蓮は深くうなずいた。

蓮は店の入り口で立ち止まった。

「また、来てもいいですか？」

「ああ、いつでもおいで」

蓮は一度頭を下げると、店を後にした。

華蓮は蓮の座っていた席に座ると、嬉しそうに父の顔を見た。

「せっかく来てもらったのに、話をしなくてよかったのかい？」

「うん。パパと話してもらいたかったから」

嬉々と言う華蓮の頭を父は撫でた。

父の目は母のことを語るときと同じ目をしていた。

厄介だね

一日一日がゆっくりと過ぎていった。

華蓮の奏でる音は柔らかい空間を生み、蓮の描く絵は心を温めた。

(ずっとこんな日が続けばいいのに……)

日に日に進む蓮の絵を見て、華蓮は時折不安な表情を浮かべた。

あの絵が完成したらどうするのだろうか、そんなことを考えることが多くなった。

そんな想いを知ってか知らずか、蓮の休憩する頻度が増えていた。

蓮はその場に座ると、華蓮と向き合い、穏やかに微笑んでいた。

「疲れた？」

華蓮が尋ねると、蓮は首を横に振った。

「その絵が完成したらどうするの？」

その質問に蓮は首を傾げた。

「考えてなかったな」

蓮は壁の絵に目を向けた。

しばらく絵を眺めると、蓮は華蓮のほうを見た。

「この絵が完成したら、君の詩を聴かせてもらえないかな」

「無理だよ。そんなにすぐにはできないよ」

「いいよ。……待っている」

蓮は促すようにうなずいた。

華蓮は一つ息をすると、深くうなずいた。

ずっとこんな日が続くような気がした。

ずっとこんな日が続いて欲しかった。

しかし、ずっとは続かなかった。

次の日、蓮は旧校舎に姿を見せなかった。

次の日、蓮はそこにいて絵を描いた。

三日後、蓮は旧校舎に姿を見せなかった。

次の日になると、蓮はそこにいて絵を描いた。

一週間が過ぎるころ、蓮はまた旧校舎に姿を見せなかった。次の日も次の日も蓮はまた旧校舎に姿を見せなかった。しかし、次の日になると蓮はそこにおいて絵を描いた。

(どうかしたの?)

その一言が躊躇われた。

蓮の来ない日が広がり、来る日が減った。

そして、蓮がいなくなった。

絵は完成されていなかった。

空虚感が心を満たした。

(いつそう空っぽになればいいのに……)

華蓮はいつもの椅子に座り、空を眺めた。

華蓮はそれでも毎日通った。

いつものようにギターを弾き、完成されない絵を眺めた。

客がいなくなった店で華蓮は一人、カウンターに腰掛けた。

そこは蓮の座った席だった。

華蓮はどうしても理由を聞けなかった。

どこかでその理由に気がついていたのかもしれない。

聞かなければ泡沫になるかもしれない。聞いてしまえばそれは途

端に現実味を帯びてしまう。

しかし、華蓮は後悔していた。

蓮と向き合うことができなかったこと、自分の想いを蓮に伝えられなかったことを後悔していた。

(君も同じ想いを抱いてくれているのかな?)

俯いている華蓮の目の前にカップが差し出された。

「彼はお母さんと同じ病気だそうだ」

突然の父の言葉に華蓮は目を丸くした。

「先日華蓮が学校に行った後に尋ねてきてね。都会の病院でしばらく入院するそうだよ。華蓮に別れを言いたくないから、黙って姿を消すことを選んだんだ」

「そんな……」

「彼はどうしようもないくらいに華蓮に恋をしたんだね。そして、彼のお母さんの言う愛を知ったんだろう」

「それが愛なの？」

「彼にとつてはね。彼にとつては万人を平等に大切にすることが愛だった。でも、恋を突き詰めて愛に変わることもある。きっと根っこにあるものは同じものなんだろう。……でも、芽が出たときに形が変わる。同じものなのに違って見える」

「厄介だね」

「厄介だよ。でも、だから、華蓮は華蓮だけの形を見つければいい。自分にとつての愛の形は自分だけが決められるものだから」

父はカップの横に手紙を添えた。

父は華蓮の背を向けると、拭き終わった食器を棚に戻し始めた。

『私の想いは愛まで届かなかったな』

不意に母の言葉が頭を過ぎった。

「パパは、ママを愛していた？」

「僕の想いは愛まで届かなかったよ」

父は振り返ると華蓮の頭に手を置いた。

「ママもそう言った……」

その言葉に父は穏やかに微笑んだ。

「僕たち二人は目一杯恋をしたんだと思う」

その目は哀しみに満ちていた。本当にこれが正しかったのか、その答えは決して出ないことがわかっていた。

「さあ、僕はもう寝るよ」

父は自室へと歩いていった。

「パパ」

華蓮の呼びかけに立ち止まった。しかし、今度は振り向かなかった。

「ありがとう」

「うん」

ゆっくり歩いていく父の背中をじっと眺めていた。

(きつとパパはまだママに恋をしているんだ)
華蓮は手紙を手に取った。

待っていて欲しい
きつと絵を完成させに戻るから
待っていて欲しい

そこに別れの言葉は一切なかった。

(ずるいよ。君ばかり想いを伝えて……)

華蓮は唇をかみ締め、目を閉じた。

蓮との思い出が走馬灯のように駆け巡ると、華蓮はゆっくり目を開けた。

一冊のノートをカバンから取り出すと、そこに『冬原華蓮』と記した。

私はまだ愛を知らない

蓮がいなくなつて一年近くが経つた。

枯れ木は秋の賑わいを見せ、川沿いではススキが風の音を奏でた。毎日のように旧校舎でギターの練習をし、学園祭では一人でステージに立った。

しかし、蓮の姿を見ることは一度もなかった。

三連休の一日、あいにくの空模様の中、華蓮と父は母親の墓石の前にいた。

雨粒は二人の傘を跳ね、優しくも哀しい音色を奏でた。

「フフン、フン、フン」

華蓮は雨音に合わせて口ずさんだ。

父はクスリと一つ微笑むと、華蓮の頭を撫でた。

「華蓮は歌手になるの？」

「どうかな？ 夢はあるけどね」

華蓮は穏やかな顔をして墓石を見つめた。

墓参りを終えると、華蓮は桶と柄杓を持った。

「これ、返してくるね」

華蓮はリズムを踏んで歩いていった。

その日は祝日ということもあり、華蓮は家で過ごした。

店も開かず、二人は親子水入らずで過ごした。

いつもは手伝うだけの夕食作りもこの日は華蓮が行った。

そして、覚えている限りの母の詩を一杯聴かせた。父もまた母の話語った。

父の話の聞いていると、時折胸が締め付けられた。いつも以上に、華蓮は蓮のことを思い出していた。

華蓮は自然と涙を流していることに気がついた。

「パパは辛くなかった？」

華蓮の父は穏やかな表情で華蓮の頭を優しく撫でた。

「辛かったよ。でも、僕たちには華蓮がいてくれたからね」

「逢いたくならない？」

「なるよ。今でもどうしようもないくらいに好きだから」

穏やかな表情は変わっていないかったが、父もまた真っ直ぐに涙を溢していた。

華蓮は父の涙を見て、いつそう泣いた。

「逢いたいよ」

華蓮は泣き疲れるまで、涙を流した。

翌日、華蓮は旧校舎に向かった。

普段は休日に行くことはなかった。しかし、どうしても蓮の絵が観たくなった。

生徒は誰もおらず、静けさに覆われていた。

美術室の前に立つと、いつも心が締め付けられた。

もういつそう来るのを止めようと何度か思った。しかし、最後には必ずここに居た。

華蓮は美術室の扉を開けた。

そこには柔らかい光に包まれた絵があった。

あの日から変わらない完成されていない絵だけがそこにはあった。しかし、華蓮は鮮明に蓮の姿を思い返した。

いつの間にかなくなってしまうていた、あの日のような画材の香りがあった。

いつもの椅子の前にイーゼルが立てられ、その上にはガラス板が置かれていた。そして、辺りには筆や絵の具が転がっていた。

華蓮の目から涙が溢れた。

華蓮は踵を返して駆け出した。

声を上げながら涙を流し、屋上への階段を上った。

屋上の入り口を開けると、華蓮は息を整え、涙を拭った。

「本当はもっと早くに君の前からいなくなるべきだった。いや、出逢うべきではなかったのかもしれない。君にとって僕は少しも優し

「くなかった」

入り口の上に登るはしごの前には松葉杖が転がっていた。

「僕は君に恋をしていたんだ」

「うん」

「君を想うくらいに他の人を想えたらどれだけ素敵だろう。そう思
つて人と関わろうとするけれど、人に優しくするたびに君への想い
が強くなるんだ」

「うん」

「この想いは愛に届くのかな？」

華蓮が入り口の上に登ると、蓮が居た。

拭ったはずの涙が溢れてきた。

「きつと、届くよ」

華蓮は満面の笑みで応えた。

蓮は手を差し伸ばすと、横に誘導した。

二人は肩を合わせながら座った。

蓮の体からは温もりをあまり感じなかった。

「君の事を想うと少しでも長く生きたいと思った。でも、短くても
君との時間を長く過ごすべきだったのかもしれない。だって、あの
日から僕はずっと君を想っていたから」

蓮は消えそうな声で語りかけた。

「最期に君に逢えてよかった」

その言葉に華蓮は目を伏せると、強くまぶたを閉じた。

蓮は真っ直ぐを見たまま言葉を続けた。

「絵は完成したよ」

華蓮は目をゆっくり開いた。

「私はまだ愛を知らない。でも、これから知ることができる気がする。
る。だって、私も初めて大切に思える人と出逢えたから……」

華蓮は顔を上げ、真っ直ぐを見た。そして、優しく微笑んだ。

華蓮はギターを取り出した。

- - - - -

つらい事があつた夜は
いつも君のことを思い出す

逃げてもいいよ
辞めればいいよ

遅れた分は二人で取り戻そう

そんな声が聞こえてくる気がして

ありがとう

だから僕は逃げ出さずに頑張れるんだ

一人になりたい夜も
君となら一緒にいたい

そう思える唯一の人

聞こえていますか
この声は

今は誰ともなしに響かせているけれど

本当は君にだけ聞かせたい
君にだけ伝えたい想いがあるんだ

穏やかな日が差し込む朝は
空に大きく手を伸ばす

そっちじゃないよ
こっちだよ

さあ、手をつなごう

そんな君の温もり 感じたくて

ありがとう

君がいるから 最初の一步が踏み出せるんだ

疑うことのない

絶対的な愛をくれる

私だけの君

届いていますか

この唄は

今はもう君はいないけれど

君のためだけに唄いたい

君にだけ送りたい想いがあるんだ

君は僕に愛をくれたから
僕は君に恋を贈りたい

情熱的な想いの結晶
君の愛で包んで欲しい

聞こえていますか
この声は

届いていますか
この唄は

やっと 巡り逢えたね

- - - - -

歌い終わると同時に蓮の頭が華蓮の肩に寄りかかった。

(ありがとう)
蓮の想いが感じられた。

華蓮は唇をかみ締め声を殺したが、零れる涙までは止められなかった。

やがて華蓮は声を上げて泣いた。

イーゼルに立てられたガラス板には絵の具が載っていた。

華蓮がいつも座る席、ガラス板を通した壁には絵が完成されていた。

ただ一言、

『この想いを君に捧げる』
の文字を添えて。

私はまだ愛を知らない（後書き）

前作『君が好き』の別物語として書きました。

愛と恋は違うものだろうか。

私の思う愛の形とあなたの考える愛の形は同じものだろうか。
色んなことをグルグル考えた作品です。

何か少しでも感じてもらえるものがあれば幸いに思います。

川本 流華

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5406p/>

まだ愛を知らない

2010年12月25日18時08分発行